

画された本書は、関係各位の前後六年にわたる苦心が見事に結実して、このほど上梓された。柴田実先生を監修者に、京都大学国史研究室の石田善人・朝尾直弘・佐々木隆爾、郷士の篤学者馬場芳太郎・細野正長以上六氏によつて編纂された本書をひもといひ、まずその内容——構成のユニークさに一驚させられる。上巻の序篇は自然環境を概観し、本篇で通史をとりあげるのは通例ながら、下巻外篇は水口今昔と題して水口の由来よりはじめてさまざまの伝承や郷土産業を三二項にわたつて興味深く展開、社寺篇は二六社七八寺その他について由緒・現状等を精説、人物篇また実に一七七名の多数にわたり、水口藩主や文人について詳しく解説、以上三篇は馬場・細野阿氏の苦心になり、さすが郷土にあつて長年の辛苦を偲はせるに十分である。下巻最後は史料篇で、以上上下二巻六篇よりなる本書は、通史のいわば補註的部分をそれぞれ別篇とすることで、本篇は「町史」として極めてスッキリした形で登場させる。しかも本篇の内容また、ありきたりの通史概説の類ではない。第一章古代の水口は、伝承の世界を埋藏文化よりみた古代水口より前におき、大化

改新と近江宮、平安期の甲賀、で古代を片付けている。一片の土器片や一つの古墳から当該市町村の原始・古代史を拡大する如き、針小棒大の史料操作を本書はとらない。中世は甲賀武士の活躍と題して、甲賀三郎の伝説よりはじめて山中文書と蒲生文書を縦横に駆使して、柏木厨代官山中氏、儀儀莊官儀儀氏の活躍を中心に展開する。山中文書の広汎な利用は管見の限り本書を初めとするが、それだけに随処に新見が紹介される。近世に入れば、まず水口宿と題して、水口宿の成立から変遷、宿の機構、宿場町の生活が、豊富な史料を駆使して詳説され、ついで助郷の村々と題して、旧水口宿周辺の諸村（近時の町村合併で、旧伴谷村、柏木村、水口町、貴生川町が合併、さらに今郷、磯峨、和野部落を加えた）の歴史が、助郷に焦点を合せながら概観され、以上の水口宿と助郷の村々を一体として叙述することで、近世水口宿のすべてが、見事に描き出されている。さらに幕藩体制の崩壊、近代水口町の成立、社会経済の発展、二度の大戦と町村、現代の水口と続けて、宿駅水口の現代に至る歩みを追究されている。以上の撫雑な紹介でもおわかりいただけるか

と思うが、本篇は、水口町の歴史的特色に則した通史として描かれ、それだけに、学問的に極めて貴重な業績といえよう。こうした方法こそが、一地方史が、広く学界にその存在を主張し得る方法であることはいうまでもない。最後に史料篇は、本篇中の主要史料である蒲生文書・山中文書・町役場所蔵文書・区有文書を収める。中でも山中文書は、ここに初めて印行されたのであるが、残念乍ら全四六七通中三〇〇通に留まつている。残りの部分も、何らかの形で印行されんことを期待する次第である。（下巻A5六三〇頁 昭和三年九月、上巻 六五四頁 地図一葉 昭和三年二月 水口町志編纂委員会発行 非売品）（熱田公）

西宮市史編纂委員会編

西宮市史 第二巻

先年刊行された第一巻にひきつづいて、西宮市史第二巻が上梓された。第一巻は市域の概況と自然環境・地理的構造を述べ、歴史編では古代より中世に到る西宮の発展過程を明らかにされたが、本巻では、第三巻に当る近・現代の西宮につながる近世西宮について

全巻を費やしておられる。

第一章近世の西宮地方では、織豊期より近世初期の政治情勢と封建支配の展開、第二章では幕藩体制確立期のそれを、西宮が西摂地方の流通の中心であり、更に広く宿駅として封建都市化する点を分析し、ついでこの時期大きく変動をとげた村落構造を明らかにする。第三章は西宮地方の商品生産として、近代化を準備した経済的展開を、綿・菜種・米などを中心に農業が商品生産に入り込む変貌をとらえ、また当時著名な上方漁業の一基地としての活動、名塩紙を主とする手工業についても触れられている。第四章・第五章は現代の主産業でもある酒造業について、西宮・今津のみならず灘地方をも含めて、その生成と展開を追求し、斯業の構造から流通過程に至る迄、余すところのない雄篇である。第六章は中期における西宮の町場の発展を各方面から明らかにされ、流通組織、金融制度などとくに詳細である。第七章農村構造は当時の農民階層分化、富農・地主経営の分析から農民闘争へと、封建制の基盤である農村の変動を追求して、第九章幕末期の政治的過程に結ばれている。もちろんかかる町場における文

化生活の面についても第八章でふれられ、中有名な戎社、百大夫にまつわる人形操りについても、西宮神社日記を引用されながら明らかにされているのは興味深い。

かくして総頁一千頁余に及ぶ大冊を通して近世西宮の姿が浮彫にされている。旧西宮町域は、今次大戦の戦火にあつて大半焼失をみたため、在町の史料については散逸も多く、若干の精粗は免れないように見うけられるが、既に学界にも著名な瓦林・岡本家文書をはじめ、農村地域の史料や酒造業に関する原史料の探訪も行届いており、またその欠を補う中央史料の利用も効果あつて、信憑のできる内容となつている。また戦後発展した地方史研究の成果が充分ふまえられ、巧みに消化されているばかりでなく、その数章は市史という内容を考慮しつつも、現在の学問的水準を凌ぐ労作も見うけるのであつて、単に一西宮の市史と云うに止まらず、広く西摂地方の通史として貴重な成果と考えられる。このことは永島福太郎・梅溪昇・作道洋太郎・津川正幸・八木哲浩・渡辺久雄・長倉保・吉井良尚・有坂隆道という各分野におけ専門家がそれぞれ学問的成果をもつて執筆されたため

と思われる。ちなみに本市史の刊行に際しては、当初より直接監修の任に当られた魚澄惣五郎博士が逝去される不幸があり、刊行事業の続行には関係者の御心労も多かつたやに推察するのであるが、本巻編集に務められた武藤誠委員はじめ各委員の御努力と、従来からも主として学界関係研究者よりなる執筆者に、非常な理解と協力を惜しまれなかつた市側関係諸氏の御尽力に敬意を表しつつ、引続き、第三巻、資料篇の刊行速やかならんとを期待して、この拙い紹介を終えたいと思ふ。(本文一〇二頁付図、昭和三五年西宮市役所発行)

(脇田修)